

昭和三十一年一月二十六日

人口問題審議會第七回總會議事速記錄

於 富士銀行七階會議室

卷之十 (一)

卷之十 (一)

卷之十 (一)

人口問題審議會第七回總會議事速記録

昭和三十一年一月二十六日(水)  
於 富士銀行本店七階會議室

一 開会 午後一時二十分

一 議半

一 閉会 午後三時四十分

出席者 (五十音順)

委員

専門委員

飯沼 一省

北岡 寿逸

上野 幸七 (代)

三原 信一

小島 文夫

古屋 芳雄

沢田 節蔵

本多 龍雄

下村 宏

幹事

寺尾 琢磨  
永井 享  
野村兼太郎  
林 恵海  
村瀬 直養  
村田 省蔵 (代)  
諸井 貫一 (代)  
山際 正道  
小畑 権清  
寶川 豊彦  
山高しげり

その他

牛丸 義留  
村上 茂利 (代)  
伊部 参事官  
黒田 技官

人口問題審議会第七回總會議事速記録

昭和三十一年一月二十六日(木)

於丸の内富士銀行七階會議室

午後一時二十分開議

○ 永井会長代理 大へんおくれましたが、これより審議会を閉会いたします。

今日けあいにく下村会長が所用が有りましたして少し遅刻をいたしますので、会長の見えますまでの間、私がかわつて議事の進行をはかりたいと思ひます。

今日の議題といたしましては、審議事項なんであります。これけ私から御説明を申し上げます。

従来この審議会で扱つておりました審議事項は、この審議会の要覽に書いてございまするが、すべて規定してあります。ことに特別部会の規定の中に、第一部会は人口収容力に關する事項、人口の地域的分布に關する事項、生活水準に關する事項とさめてあります。第二部会の方は人口の量的調整に關する事項、人口の

資質向上に関する事項としてありますので、従来はこの規定に基づきまして、第一部会では人口収容力に関する事項を扱って、すでに決議をしたのであります。

第二部会の方は人口の量的調整に関する事項を扱いました。これまた決議が済んだのであります。しかるにこれから将来はどろい工合に審議事項をきめたらよろしいか、この席上でおきめを願って、それに従って進行した方がよからうと考えて、実は今日その御相談もいたしたいと考えてあるのであります。もっとも従来からこの審議会とは表裏一体をなして活動しております。財団法人の人口問題研究会におきまして、人口対策委員会というものを設けて、そこで第一、第二の特別委員会まで審議しております。第一特別委員会の委員長の方はこの審議会の委員をしております。山中博士であります。第二特別委員会の委員長の方は今日御出席になつていらつしやいます。審議会の委員である寺尾博士にお頼いしてあるのであります。それを今日までにすでに三回ほど審議を重ねまして、第一特別委員会の方では、世間で申す潜在失業の分析と対策という議題で審議を進めており

ます。ことに山中君はこの方面での権威者であり、研究家でもあります。議事  
が今ほとんど進んでおります。従来失業問題審議会などで扱ってありますのは、  
依然としていわゆる失業問題であります。外に現われた失業者であります。潜在  
失業者については、触れてはおりますが、それを分析して対策を立てるまでに  
はいつておりません。これは人口問題、つまり過剰人口の問題の急所でありまし  
て、この問題を明らかにしなければ、日本の過剰人口というものはよくわからな  
いだろう。そこで特にこの潜在失業の分析と対策という題を進めております。

第二特別委員会の方ではいわゆる人口の質的向上であります。これはまた  
範圍がもろかしいのであります。遺伝のことばもとよりであります。一般に身  
体の健康上のこと。——いかに死亡率が下つても病人が多い、健康がその割合  
に増進しておらなければいたし方ないのであります。それらの問題も扱つ  
必要があります。あるいは見方によりますと、広く心的健康の問題、つまり  
心身ともに健康な人口を養つなければ、いかに數量の調節をいたしても仕方な

いのでありますから、結局今までの審議の模範では、寺尾委員長の御意見もありまして、近年人口の構成が一変してきた。性的にも年令別にも、また出生率、死亡率等も非常に変わってきた。それが人口の質にどういう影響を及ぼしてきたのであろうか。そういう方面から着眼をして議事を進めようということに大体方向は進んでおります。

この二つの問題を何月ごろとけっしりは申し上げられませんか、三、四月か四、五月ごろには結論が出るのではないかと思っております。つきましてはこの審議会におきまして、ここも予算が十分にとれておりませんから、また新たに人口対策委員会で調べておるようなことを繰り返されては時間もかかるし経費も非常にかかりますから、便宜上この二つの題目を御採用下さいますれば、その案ができ次第、世間に公表する前にこちらの方へお回しをして、部会でそれぞれ御審議を願ひ、その上で起草委員会を作られるというようにしたらいかかきものであろうか。それとも別にこの審議会では問題を新たにいたしまして、こういう審



議事項にしたいという皆さんの御意見でありますれば、そうしても一向差しつか  
えのないのであります。この問題を第一に御相談を申し上げたい。

人口白書に關する特別委員会はまだ崩れておりませんが、これは二月早々崩さ  
まして、案をだんだん進めて、今年のうちにはなるべく早く白書をこの審議会の  
名において公けにしたいと考えております。

いかがでございますでしょうか。この審議事項について何か御意見を承わることば  
できないでありませんでしょうか。—— 寶川さんいかがですか。よろしいですか。

—— 沢田さんいかがでしょうか。よろしゅうございませうか。—— それでは御  
異議もないようでありますから、研究会の人口対策委員会は今の二つの事項をな  
るべく取り急いで審議を進めまして、案ができた時審議会の方へお返しして、そ  
して部会でまた御審議を願う。そういうことに御承認を得たものと承知してよろ  
しゅうございませうか。

○ 沢田委員 これは審議事項じやないのですけれども、こういう会合をそうたびた

びお崩きになることのできないことも承知してあるのですか、この審議会ができませんしたのは二年半ばかり前に存りますが、皆さん御承知の通り一部会、二部会で決議をして政府に提出してあるわけです。あれは御存じの通り非常に広範な結論が出ておりますから、左か右かあの通りに右から左とすぐいかぬことはわかりませんが、中には割に手早く実行のできる事項もあるのじやないかと思つておられます。あれをごらんになりますと、第一部会で山縣さんがえらい苦勞を重ねられて大へんけっこうな案ができましたが、あのときの山縣委員長の御説明でも、あれに盛りたててあることはもはやすでに互に知り尽しておられることとあります。ただこれをどう実行するか、いつ実行するかという問題が起つていゝということをお知らせして、まさにその通り、私も同感に存じております。そのいったものですか、それのために特別この委員会を附けて下さいといふことを要求するわけではな

いのですが、あのうちのどういふものがもうすでに行われておりますか、ことに第一部会の結論については、御記憶願つてあるかしれませんか、私個人としては

ある点に不満足な点がありました。皆さん多数の方の御同意なされたことですから、それに服してはおりましたけれども、そういう不服なところもどういうよ  
うなことになっておるのか、私個人としてそう思いましたこと、これも承知したい  
のです。もし将来こういう会議が開かれるときは、厚生省の方ではそれを一つお  
知らせいただき、会合をひんぱんに開くことができなければ、随時書面でも知  
らしていただいて、せつかく皆さんをお叱しいところを骨折ってやっていたとい  
たことなんですから、それがただほこになつては、まことにどうも残念なこと  
であるし、かつまた将来の努力に対しても、決議をしてただ書面をこしらえて政府  
に出しておけば、それで済んだということでは、何のためにこういう会合を開いた  
かわけがわからぬ。これと反対にわれわれの決議しました事項が、このまま急  
なかなかこれは予算の關係もありできないが、この点はこうなつておるとい  
うことを知らしていただければ、今後の努力に対する非常な奨励になるのじやないか  
と思ひますから、これは審議事項ではありませぬけれども、将来の取扱いにもし

御同意を得ますれば、そういう取扱いをしていただきたいという希望を一つ申し上げておきます。

十

○ 永井会長代理　その点はごもつともでありますから、厚生当局の方と御相談いたしまして、できるだけ今の御希望に沿い得るようになりたいと思っております。

その他にもどうぞ御意見がありましたら、審議事項には限りません。この運営につきまして何か御意見をおっしゃっていただいてもけっこうです。

○ 北岡専門委員　ただいまおきめいただきましたことも、議題にすることは大賛成であります。ちよつとそれに関連しまして五分ばかり、この前の秋に開かれました国際家族計画会議で、非常に有力なレポートもございましたから、この機会に御披露を簡単に申したいと思うのでございますけれども、ただいま決定になりましてこの国氏の素質の向上という問題は、言うにややすくして実行はきわめて困難な問題でございます。おそらくこれを立案しなければならぬ人は、ちよつと額をかめておられるのではないかと思うのでございます。しかし同時にこの問題が非

常に重要であるといふことは各方面で認識されておるのでございますが、ことにこの前の国際家族計画会議で、ロックフェラーが関係してやっているアメリカのポピュレーション・カウンシルの代表者でありますオスボーンから、非常に有力な意見が出ておる。こういう趣旨です。昔は死亡率が非常に高くて、生まれた子供でもあまりよくないものは死亡によって淘汰されて、どちらかといえは優秀な者が残って子孫を繁栄した。そこである程度の淘汰作用が死亡によって行われた。今日非常に死亡率を減少しててへんけれども、ことに違いないのですが、生れた者の九五％といふものはみち成人になつて子供を生む。こうなると死亡によつてセレクトされるということが全然なくなつた。従つてわれわれ民族の向上をけるためには、どうしても出生による淘汰といふことを考へなければならぬ。しかも今日出生といふ問題は、多くの国におきましては育児手当というふうなことによつて奨励してやつておるのだから、この場合においてやはり淘汰を考へまして、なるほどこういう素質の人は子孫を残してほしい。こういう素質の人

はあまり子孫を残さない方がいいだろうということ、適当な方法によって差別を  
つけて、それによって出産の補助、奨励に手心を加えるのがいいのじやないかと  
いうことを言っておる。

これを具体化して法律にすることは、ほとんど困難でありますけれども、これは  
何も法律によってやれるものではないし、もとより日本には優生保護法がありま  
して素質の向上になっておるわけですか、いかにも規模が狭くて解釈も固い、大  
規模に法律をもって実行することは困難でございますか、一般の社会に対する社  
会教育によって、この優良な子孫を残し、優良でない子孫はあまり残さないとい  
うことに心がけるといふことを教育宣伝することは非常に大事なんで、そういう  
方向につきまして注意を喚起するといふことでも意味があるのですから、私はこ  
の問題はぜひこの委員会を取り上げてやっていただきたいと思つております。

なお、そのほかにもベンディンその他の諸氏から非常に有力な意見がございま  
して、アメリカをんかにおきまして、も大きな問題に亘りつつありますから、一つ本

会におきましてこの問題について十分の審議を尽しまして、いい案をお作り願いたいと思います。

○ 永井会長代理　ありがとうございます。もっと皆さんの御意見を伺いたいのであります。山際さんが欧米をお回りになりました。今日はその御視察談を願うことになって、一時半からのが少しかつおくれましたが、それが済みましたならば、黒田學生技官がインドネシアの方へ行つてこられたので、東南アジアの人口問題のお話を伺うことになっております。山際さんお願いいたします。

○ 山際委員　私　今年の秋から暮れにかけて世界を一回りして参りました。永井先生から何かその感想を申し述べろというお話でございます。私は自分の関係しております経済方面の問題で主として回つて参りましたので、いろいろ申し上げても、こちらのお役に立つようなことがないかと思ひますけれども、せっかくの餌指多でもあり、私の旅行中に感じました若干の点について申し上げてみたいと思ひます。

私は昨年の九月の十五日に東京を出発いたしました。十二月の二十日まで、九十  
六日間にわたりまして中南米、それからアメリカ、ヨーロッパ及び東南アジアの  
各地、約二十ヶ国を訪問して戻つて参りました。今日は交通機関の発達で非常  
に便利にはなりましたけれども、しかしそれでも三月余りの日数でこれだけの国  
を回りますことは、非常にむずかしいのであります。ただ私が旅行いたしまし  
た目的は、私は実は昭和四年に欧米を一回りいたしました。以来海外へ出たことは  
ございませんので、初めてのような旅だったのでございますが、これを本にたど  
えて申し上げますと、亭論が総論をさつと読もうというつもりで、あわただしい  
旅行をいたしましたようなわけでございます。自然、特定の事項あるいは特別の  
地域について深い調査をしたり研究をしたりする時間はありませんでしたから、  
申し上げることもばなはだ抽象的な感想にとどまるので恐縮に存じますか、その  
辺は旅行の目的かさうであつたといふことでお許しを得たいと考へます。  
申し上げますように私はまず羽田からロスアンゼルスを経ましてメキシコ、



パナマ、ユリ、アルゼンチン、ブラジルと南米の諸国を回りまして、アメリカのテキサス、ワシントン、ニューヨーク、あの辺を経由いたしました。それからヨーロッパ、まずイギリス、フランス、ドイツ、スイス、イタリア、それからエーゴスラビア、ギリシヤ、トルコへ参りました。さらに今度はアジアに移りましてパキスタン、インド、ビルマ、タイ、フィリピン、香港、これだけを経由いたして参ったのでございます。

出かけるに当りまして、自分の頭の中では何かしかの問題を考へたりして出かけたのでございますが、そのときに一番やはり私の反持の中で大きく感じました問題、日本におりました常に気になる問題は、世界は平和を維持することかできるか、あるいは第三次世界大戦というもの避けがたいであろうかということにしばしば迷うのでございます。世界の人はその問題についてどう考へているだろうかといふのか、実は私の一つの問題であつたのであります。

南米へ参りますと、私の接触いたしました範囲では、戦争か平和かというよう

な問題は南米ではほとんど顧慮がないのであります。むしろその問題は北半球の問題であつて、われわれとしては別にそれは関係がない。むしろ、どこかで戦争でも始めてくれたら、勢いわれわれの方はその繁栄を受けて、経済状態がよくなるだろうといふくらいにしか考えていないのであります。アメリカを経、ヨーロッパ各地を廻り、さらにまたその北の地域に行きましても、私が接触しました範囲の方々の考へは、やはり現在御承知のように東は日本の端からホッと西へ行つてアジア、中近東、地中海、アフリカに至るまで、ソ連と中共の境を接するあたりは玄範圍にわたつていろいろを地方的な問題が起つております。アフリカの北海岸でいろいろな地学的な問題がございますし、あるいはサイプラスの問題であるとか、アラブ諸国とイスラエルの問題であるとか、カシミールの問題、中近東諸国に対するソ連やアメリカの援助をめぐつてのいろいろな問題、仏印の問題、あるいは朝鮮、台湾、その他いろいろな問題がありますけれども、しかしそれらの人の気持は、大体これらの問題は地方的に解決し得る問題であるか、乃至は国際

的な話し合いによつて解決を見出し得る問題であり、またぜひそうしなきやならぬ。原子力の時代になつてここで再び大戦争を起すといふことはむろん極力阻止しなければならぬし、また避け得る問題であるといふ一種の信念を持つておるよ  
うな感想を受けたのでございます。私は経済的をいろいろな観察をいたします際  
に、この問題はやはりいろいろな経済活動をする一番大きな前提として、人々の心  
の中に意識的もしくは無意識的にも存在しておる問題ではないかといふふうに観  
察をいたしました。御承知のように、今世界ではアメリカを初めヨーロッパの主  
要の国々は経済的に見て非常な好況にございます。いわゆる好景気でございます。  
そこで、その次に私が抱きました疑問は、何ゆゑにアメリカ及びヨーロッパ主  
要諸国はこんなに景気がいいのであろうかといふ疑問でございます。そしてまた  
その好況といふものは一体いつまで続くであらうか、これがまた私の疑問でもあ  
つたわけであります。

アメリカへ参りましていろいろな要路の人々や民間の指導階層の人々に会いま

して、同じように、非常にこの問題を何へんも何へんも繰り返して尋ねたわけ  
あります。それらの人々はほとんど結論においては一致いたしておりました。

つまり現在のアメリカが非常な好況にあり、失業の問題をんていうものは存在せ  
ず、むしろ労働力不足をくらいであるという状態については、これは相当永続性  
がある、むしろ行き過ぎは警戒をしなければならぬ、たとえは私か指摘いたし  
ましたのは、消費者信用というものが極度に拡大されておりました、個人の生活  
においては家の問題でも、あるいは自動車とか家具とかテレビジョンとか合所道  
具とか、ほとんどすべてのものがもうすべて頭金をしの月賦で買える組織になつ  
ております。従って、毎月もらう月給は、その相当の部分が月賦の支払いで払わ  
れていくというような状況になつておるのであります。これが果して健全である  
かどうかという問題を提起したわけなのであります。これらにつきましても、政  
府の人々や民間の人々はいずれも確信をもって前途その心配のなことを説明す  
るのであります。むしろ、人間の欲望は無限に拡大していくのであるけれども、

それに対してアメリカの持つ科学技術の進歩というものは、優にその欲望を達成せしめるのに同じようなスピードで前進をしてゐる。しかもアメリカ内外を通じてこれを充足するための資源というものはほとんど開発されていささかもその前途に行き詰まりというものを感じさせない。しかもアメリカは第一次歐洲戦争、次いで第二次の歐洲戦争を経てきてゐる間に、いかにして自分の国の経済的繁栄を維持するかということに關する十分な経験と、十分なそれに対処すべき方策を會得してゐる。現在のアメリカは何ら政府として特別なそぐいつたための政策を實行してゐない。準備は十分にあるのであるから、もし将来何かしかりセッションを必要とするようなことが起れば、いかなる方法をも繰り出して、アメリカの経済活動を落さずに進むことができるとを確信するといふことで、いささかもその前途について心配をいたしておらぬのであります。

私か次に大きくアメリカの同意として考之を聞きましたのは、例の農業問題であります。余剰農産物をたくさんかかえまして、しかもある程度の支持価格によ

つて農産物の価格を維持しておるアメリカの政策というものが、アメリカが原則論として主張する経済政策から見ると、いささか邪道に属するように私は考えますので、その裏についてもいろいろ意見を聞いたのであります。理論から考えてこの問題についてはアメリカの要路の人たちもちよつと困つておるようであります。それは私が指摘する通りであつて、なるべくアメリカの経済構造を健全に保つ上から言うならば、ああいう制度はできればなくして済みたいわけであるけれども、やはりあの問題は政治的な問題を多分に含んでおるわけであつて、そう急に思ふような状態に持つていくことはむずかしい。しかしあれによるアメリカの負担というものは、アメリカ全体の経済に大きな影響を及ぼすほどの負担ではないと思ふから、あの問題を徐々に解決していく時間というものはアメリカの経済には十分与えられておる。こういう見解を述べておつたのであります。

アメリカで特に感じましたことは、アイゼンハワー病気をいたしまして、この病氣についてはやはりかなりのショックを各方面に与えたようであります。

しかしアメリカの要路の人々の説明は、アイゼンハワーの病氣はなるほど非常にわれわれとして残念であるけれども、しかし今日ほどアメリカの各界にわたってムーム、ワークがよくとれておった時代はなかったと思う。そのムーム、ワークがよく維持されておるから、アイゼンハワーは病氣ではあるけれども、アメリカの運命というものについてはいささかも心配はない。こういう確信に満ちたような答え方をいたしておったのであります。

アメリカについてさらに一つ私を感じましたことは、世界を歩いて戻りて、御承知のようにアメリカはいろいろ人を意味において各地に非常な援助資金や投資や、その他形でいろいろお金を出しておるのであります。しかしながらそれらの各地の人々は、必ずしもアメリカ人に対して好感を持っていない。むしろアメリカ人がいやだということもあるのでありますけれども、この争案についてアメリカがほぼつぼつ反省を始めておることです。最近のアメリカの新聞雑誌等におきまして、なせわれわれはかくのごとく犠牲を払っておるにかかわ

らず、みんなからきられるのであろうかということの論評がだんだん出ております。ことに最近はその関する著書までも発行されつつあるという状況であります。私はやはりアメリカがそこに一つの進歩と成長を遂げてきておるようになっているのであります。これは今後どういうふうになつて参りますか、おそらくはアメリカもこれで深い反省をして、将来のやり方を幾分か変えてくるのじやないかというふうな気がいたしました。

ヨーロッパにわたりました。イギリスへまず参つたのであります。ちようどそのとき昨年の秋イギリスでは国会へ補正予算を出しておりました。時あたかもイギリスにややインフレーションの傾向が起さつつある、イギリスの持つておる外貨の蓄積はだんだん減つていくといふことで、左かなか論議がやがましかつたのであります。そのときに大蔵大臣のバトラーが、ちようどその財源として消費税を増徴して、それによつて歳出をまかなうといふ補正予算を出しておつたのであります。これに対してもイギリスの財界筋その他主としてロンドンの町の連中



は、あまりいい点を与えないのであります。インフレーションをキエックするた  
めには、バトラー大蔵大臣は歳出を切るべきであった。そして財政のつじつまを  
合わせるべきであったにかかわらず、ことに消費税その値を上げて、むしろ物価を  
上げるような措置に出でていることは、はなはだ解せないということである。い  
ろ評判が立っておりまして、要するにバトラーのやり方は手ぬるいということ  
論議があったのであります。その間、やがてバトラーはイーデン総理大臣と意見  
が合わなくなつて別れるのでせいかといううわさも、実は出ておつたのであり  
ます。しかも一方において、ただいま申し上げました通り外債の蓄積がだんだん  
減つていくということ、ポンドの価値が将来維持できるかどうか、これが当時  
の話題であつたのであります。私はその問題もやはり私の興味のある問題として、  
アメリカでもヨーロッパの各地でも、いろいろな土地に参りまして、旅会あるご  
とに意見を尋ねてみたのであります。なるほどイギリスは一種の経済危機に遭  
遇しており、相当困難な事態が起るであろうけれども、しかし結局においてイギ

リス人が持つところの良識と申しますか、寧識と申しますか、またあの粘り強い性格というものが、最後のどたんばにおいてポンドの価値を守るであろう。ことにバトラー大蔵大臣が存在する限りは、ポンドの価値維持については心配がないというようなことで、要するにイギリスに対する各国の信頼というものは否かなか厚いものがあつたのでありまして、さすかイギリスけるほど各国の信用をかち得ておるものだということに、私は感心をいたしたのであります。むしろ人によって、スモ近ごろはいわゆるフル・エンプロイメントでありまして、むしろ人によつてはオーバー・エンプロイメントであつて、人手不足から起るいろんを困難が予想されるというようなことさえ申しておりましたか、失業の問題は解消してある。

ドイツは、おそらく私にヨーロッパ諸国のうちでは、最も経済的に繁栄をいたしておる国だと思ひます。これまた非常な努力を不足を訴えておつて、雇用の面から申しますと、むしろその裏において問題があるというふうに觀察をいたしました。ドイツが戦争に負けてからこの十年の間に、何ゆえにかくも経済の再建に

成功をしたのであるかということかまた私の興味ある問題であつたのであります。そのことについて例によつて会う人ごとに意見を聞いてみたのであります。大体においてドイツの人や、また外側からなめておる人々も、結局それはドイツが行つた通貨改革をもとにして、その後絶対に健全財政を守つて、しかもアデナウアーの経済政策がよろしきを得て今日に及んでおるといふ、一般的を解説で大体統一されておつたのでありますか。私は帳会を得ましてシマハトという人に会つてみたのでありますけれども、シマハトもやはり同じようなことを言つておる。さらにいろいろ話をしていきますと、結局においてドイツの国民というのは、働きたくて働きたくてしょうがない習性を持つておつて、その働きたい習性というものは結局今日の国家を建設してきている。こういうシマハトの意見を人でありませう。

そう聞きますと、実は思ひ合せることがございまして、ニユーヨークへ行きましたときに、日本の留連の大使に所談を行つておられるわけでありませうが、そ

の加瀬君の語に、実はここに来ておるドイツの代表者は、おもしろいことに土曜日に休まないと言うのでございます。ニューヨークは御承知のように土曜と日曜は全く普通の休日でありまして、だれも出勤する人はいないし、何ら町の活動はないわけでありますけれども、国連に来ておるドイツの代表だけは、土曜日にも出勤するのであります。ある日、加瀬君が、土曜日に出て来たって用事がないのだからしようがない、無駄じゃないかと語をしたら、いや、ドイツ本国では土曜日は休みではない。だからわれわれは出勤するのだ、こういう話であります。もう一つ言っておりますことは、その代表者を加瀬君が、一緒にゴルフをやるうじやないかと言つて誘つたのであります。そうしたらその人の言うのに、ありませんが、実は自分はゴルフをやりたくないのだ。なぜやらないのかと聞きましたら、私は好きだし、やろうと思へばできる状態にある。しかしながら考えてみると、ドイツ経済復興のレベルから言つてゴルフというスポーツはドイツ国民にはまだ早過ぎるスポーツだ。またもし自分もニューヨークでそれを始めれば、ニューヨーク

ケの争鬪前におる部下の連中がやりたがっておるのだから、これに對してとめるわけにいかなくなる。だから自分はやらない。こういうことで断わられてしまつたので、實際ドイツ人の働くのにはかなわぬという加瀬さんの話だったのであります。全くドイツ人はよく働く国民のようであります。

前後いたしますけれども、ずっと二十カ国を回つてみまして、私け世界で一番よく働く国民はドイツ人と日本人であるといふことをしみじみ感じました。日本の国の人はどうもあまり働かない。ことに南米の人は、これはまあいろいろな理由で生活が楽だといふ点もありました。働かないのでありますけれども、ドイツ人と日本人は断然働いておる。戦後日本では、どうも日本人は昔ほど働かなくなつたといふ言を聞きすけれども、国際的水準から言つてどうしてどうしてなかなか働いておる。ただドイツと違ふところは、社会の構造やすべての習慣などが、ドイツにおいては非常に合理的にできておるために、ドイツ人の働いておるのは、すぐにその効果を現わすのであります。それに引きかえて、遺憾ながら

日本ではそういう辺が整っておりませんから、いかにもむだ働きが多く、つまりぬことのでかけずり回ることが多くて、結果が一向現われてこないというだけの違いがあるので、働いているのは事実だという感想を持った次第であります。

ちようと旅会を得ましたので、私は東ベルリンの方も数時間の間いろいろ車で乗り回したり、あるいは散歩したりいたしました。一見やはり西ドイツの復興と東ドイツの復興が、西ベルリンと東ベルリンの各般の情勢に現われてきているように思います。その実から考えますと、経済的に見ます限り、西ベルリンの復興ははるかに東ベルリンの復興をしのいでいるということが、私のあざやかな印象でありました。東ベルリンの町にはレーニンの銅像、スターリンの銅像、ドイツ解放記念公園というりっぱな公園や、あるいはロシマの無名戦士の墓とかいろいろできていますし、労働者のアパートその他一生懸命やつてはいるようでありませけれども、何となく、せい一はいまっておいてこの程度だというような感想を、実は旅行者に与えるように思われるのであります。いろいろを両方の競争も

ありましようけれども、そこへいくとやはり西ベルリンの方が、経済的にはだいぶ立ちまざっておるといふ印象を受けたのでございます。爲替のレートなども、バーから申しますと、東ベルリンの方は五分の一ぐらいに下っております。それだけ物価が高くなっておりますといふようなことで、その印象は、実はあきやかに残ったのであります。

先ほど申し上げました西ドイツの労働力不足は、東ドイツの方から初め二四五百万あった人口のうち千万人が西ドイツへ移って来たということによつて、よほど救われておるようであります。それでもなおドイツは労働力不足であつて、イタリアその他から季節的の労働者を入れていろいろな仕事をさせるといふようなことで、その不足を補つておるといふ説明を聞いたものであります。

フランスにいたしましたし、いろいろな政治上の問題といたしましては、しよつちゆうごに、ごたが絶えません。これは昔からそのようでありますか、しかし経済問題に關する限りは、フランスにおける資本の蓄積その他経済の基礎は非常に強

國に在りつつあるのであります。全体としての感想は、やはり私はフランスも好況にありつつあるのを感じを持ってたのであります。

ところがアメリカにいたしても、イギリス、ドイツ、フランスにいたしても、なぜかこういうような好況をこの際において維持できるかという問題に、るのであります。中南米、それから東ヨーロッパのギリシマとかトルゴとかエトラスラビヤとかいうところ、それから東南アジアなどを經由いたしました。そして私はふりかえってそれらの欧米の主要國のことを考えてみますと、これらの經濟後進國と申しますか未開發地域と申しますか、これが欧米の主要國によつて現在非常に急速に開發をされつつあるのであります。未開發地域には實に豊富に資源が蘊されておりました。また人口も非常に稀薄であつて、これに開發の手を加えれば比較的容易に各種の資源が入廂の利用のために出てくるという状態にあります。ので、アメリカにしてもイギリスにしてもドイツにしても、フランス、イタリアに至るまでかやつておる。そういういたしますとそれらの土地の住民は非常に購買力



を増すのであります。自分の柱んである国の眠っている資源が崩壊されることによつて、その土地自身の人々のふところ工合がよくなるのでございます。自然そのよくなつたふところ工合に対して、今度はまたアメリカ、イギリス、ドイツ、フランスといったような国がいろいろな商品をそれらの後進国に売つておる。また崩壊しては、その土地の国民の購買力を増して、それに対してまた物を売つていくという種類の経済循環が、世界を通じて今しきりに起りつつある。これが世界の経済の輪郭をどんどん一回り一回り大きくしつゝあるのだ、こういうことに私は考えたのでございます。平和景気、崩壊景気というものが、すなわちこの欧米の景気を支持しておるし、またそれがね返つて後進国の崩壊にも非帯な進歩が見られる。こういうのが現在の世界の経済状態をなさないかというふうに思われたいのであります。

それについて私が特に興味を持ちましたことはヨーロッパの国々、これは御承知のように案外小さな国がたくさんございませうので、人口千万にも満たないよう

な国々がお互いに境を接してたくさんあそこに集まっているのでございませうけれども、これらのヨーロッパの国々は、あたかも全歐洲を打つて一丸としたような經濟共同体とでも言うような立場に、知らず知らずに結集しつつあるという事實を私は見のかし得ないように思ふのであります。シエーマン・プランその他によつて鉄、石炭を歐洲全体が共通に活用するとか、あるいは支払い同盟によつて歐洲各国の勘定は一カ所に集めて決済するとか、現在いわれとおりますのに交通、通信関係で、もつと行き末を便利にしよう。小さな国が国境を飛びめぐらし、この不便な状態のままに置いたならば、どうしてこれは世界の進運に活わぬかということ、何とかもつと便利にしようじやないかという相談をしておるといふ語でありました。

たとえば、具體的の計画といひましたは、スイスでありましたが、ヨーロッパの各国がお金を出し合つて鐵道の貨車の大きなプールをそこにこしらへ、ヨーロッパに必要に応じて貨車を配給し得るような國際的な汽車会社をスイスにこ

しらえておいて、各国産物の交流に有無相通するような配給をしようという計画を持つてきこある。あるいはまたドイツで起した電気をフランスで使わせるとか、スイスの電気をイタリアで使わせるとか、スペインとフランスとの間にも同じような問題があるとか、そういうふうにはヨーロッパ各国はおののおのの国で戸戸を閉ざしておつたのでは世界の進運に沿わないから、全歐洲を打って一丸とした共同体で經濟の拡大をはかろうという現實の動きが見受けられるのであります。これは非幣におもしろいことだと思つたのであります。つまり世界の經濟が拡大して参りますと、ああいう国々は一つの經濟單位としてはもう存立できなないのである。たとへば南米を含めてのアメリカ地域であるとか、あるいはソ連のブロックであるとか、中共のブロックであるとか、インドのブロックであるとか、こういうことになると現在の拡大された世界經濟のもとにおいて、一つの單位を主張できるのでありますけれども、ヨーロッパそれぞれは、獨立の單位を主張できなかつてきているのではないかというふうに感づるのであります。そこで全歐洲

が経済的に一丸と成つて、そこに一つのユニットを作る。ユニットを作るという意味は、たとえどのユニットにおいて経済的変動が起つても、大した影響を受けずにその地域の経済が運営できる。かりに将来アメリカに反動がきて不景気が起つたとしても、そういう態勢が築かれておるならば、ヨーロッパの不況の影響を受けずに自分たちの経済の運営がまかせる。こういうことを意味するのだらうと思ふのであります。

そういうような眼でだんだん見て参りますと、やがて私は東南アジアにまたわけでありますか、これは中南米が今主要諸国の経済投資その他によつて非常に勢いで崩壊されつゝある。また蓄積された購買力によつてそれらの中南米の国々はいまからも比較的低い程度の産業を起しておる。いわゆる好況下に実績を上げつつあるというのに比べますと、東南アジアの方は何としてもまた植民地時代を脱して来ても日かたちませず、各国いふれもその独立の熱意には燃えておりますけれども、遺憾ながら力が及ばぬというような状況に伺われるのであります。方か

んすく経済的發展のためには、その前に解着されなければならぬ幾つかの政経問題が、たゞさんに横たわっておりまして、そのために東南アジアの崩発は遺憾ながら中崩米の崩発に比べれば、だいぶおくれておるといふ感想を持つのであります。

ここで日本を考之のうちに入れて考えてみますと、世界の経済の動きが、さういふふうな動きで経済の輪郭がだんだん大きくなっていき、また世界に一つの單位として燃むという意味から申し上げますと、日本の姿というものはまことにこれは貧弱なもののように思われるのであります。せめて日本も入った東南アジアの国々も、今申し上げましたような意味でも、世界の経済において一つのユニットとして、他の影響を受けることも比較的少いように、有無相通する経済共同体のようなものまできていくならば、これはまた非常にいいのであります。そのためには今申し上げたようないろいろな経済上の問題があるということに思い当るのであります。

大体私は世界の景況をさういふふうに判断いたしますと、日本が最近一、二年

の向に非常に貿易が伸びて外貨がたまってきたということ。それは一体どういう意味だろうかということに思い及ぶのがあります。日本が最近輸出が伸びて外貨が非常にたまったということにつきましても、各国は実は非常に驚きをもってこれを見ております。どうして日本はこんなにわずか一年の間に大転換をしていい成績をあげ得たのであるか。まさに奇蹟であるか。お前はその秘密を知っておるかというようなことを聞かれたのでありまして、実は非常に冷汗ものように感じたのであります。と申しますのは、私の考えをありますか。世界は今どういふふうには経済の輪郭を一回り大きくするために非常な努力をしておるのでありますけれども、そのためには未開發地域が要求し、また欧米主要国自身も国内における需要から申しまして、現在の生産設備だけではその需給のバランスがとれないと思ふのであります。そのために欧米諸国では日下非常に勢いで生産力の拡充、工場の拡張をやつておる。鉄、石油はもちろんのこと、その他主要なものについてどんどん拡張しておるのであります。またただいま申し上げましたよう

に中南米その他、の国においても、自分の力の許す限り、あるいは紡績であるとか、あるいは各種の加工工場であるとかいうものをどんどん建設してある。それでも全体を取り巻く需給が合わないの、足りないところを日本に注文してきておる。日本はみずからの力によって市場を崩壊して、この輸出を伸ばしておるといふよりも、今そういう趨勢の中に起りつつある需給のアンバランスを埋める意味において暫時に日本に品物の注文が来ておる。こう解釈するのは妥当ではないかと思ふのであります。そうしますと、大体において改米奇り後進国の経済建設が一巡いたしましたして、それだけで一応需給のバランスかとれるという日が来るのではないか。それから先、果して日本へ物の注文がくるであろうか。こういう懸念を感じたのであります。私は大胆な言い方ではありますが、そういう意味においての経済建設が一巡するのために、そしてまた需給が一応そこでバランスするまでには一、二年の期間しか残されていないであろう。従つて日本の貿易が世界のはね返りで済むという時期は、ことしけいいだらうし、また来年もどうやらい

いだらうけれども、しかし再末年になつたら怪しいぞということをお私に申してあるのではありません。どういたしますと、日本の国の将来というものを考へますと、どうしてもこの四つの島に一億に五千人近くなろうという人口をかかえて、これに生活水準を上びながら経済生活を言ふていくということは、非常なむづかしいことと言わなければなりません。そこでどうしてもわれわれは、われわれの経

われわれの経済活動の範囲をいふるべき形に

おいて海外に求めなければならぬ。国際場裡においてわれわれの経済活動の範囲の拡大をけつていかなければ、この日本人全体の生活水準の向上がむずかしいこと、こういうことに懸着するのであります。世界は私が申しましたように投資景気が支持されておるとするならば、日本もまた幸い今わすかながらも外貨の蓄積のふえて参ったところでありませう。また技術としては非常なすぐれた点もあるわけでありませうから、この際思い切つて海外に進出をして、あるいは企業を進め、ある



いは合併事業を言ひ、あるいは各種の投資をする。そしてまた貿易がそれに伴つて進展するといふ思い切つた方策をこの一兩年の間に立てていくのでなければ、そのチマンスを失うであらうといふことをしみじみ感ずるのでありまして、どうか今後そういう線に沿って日本の市場の拡大、日本人の活動し得る分野を広めていくといふことに、せむ努力いたしたいものだといふ気がいたしておるのであります。

そう考へて参りますと、一体日本人は今の姿のままで、今後そういうような国際市場裡への仲間入りあるいは發展ということか、期し得られるだろうかといふ疑問を持ったのであります。これに対する私の自分での答へは、現状のままどこれはむづかしいといふことでもあります。世界各地を回つてみますと、終戦後在外公館あるいは銀行、商社、あるいは新聞の特派員、その他旅行者もそうでありませけれども、なかちか日本人は各地にたくさん出ておりますが、果してこれらの者か私か考へるような意味での国際的な仲間入り、経済活動が十分できておるか

どうかという点であります。遺憾ながらそれ水がどうなっていない。一番そのために見劣りがすること、これは実は沢田先生に申し上げたのであります。言葉の問題であります。言葉の問題というものが国際的な活動をする上にいかに大争の問題であるか、これは申し上げるまでもない。率直に申しまして、日本の在外公館も、それから商社も銀行も新聞記者も、みんなこの要においては手お一つう努力を要するところが多いのであります。たとえば商社を申し上げますと、商社の人々は戦争中のブランクもありました。各地へ出張してその国の言葉で商売をするということが非常にむずかしい。しいて一生懸命努力を使つて、不完全ながらも朝から夕方までかかつて商売の話をしたとしますと、それが全精力を消耗してしまつて、それからあとは何にもする元気が出てこない。やむを得ず日本人の商社の方が集まつて、そこで酒盛りをやつたりマージマンをやつたり、日本の延長のような姿で夜を迎える、こういうことにちつてしまふのであります。商社の人たちにいたしましても、ほんとうのところは、着任した日から二、三年たつ

て自分が本社に帰る日のことを考えておる。どうしてもその間に大きな手柄と申しますかヒントを一本打って、そして日本へ帰ったら今度は課長に就任するとか部長になるとかいう計算を立てる。そうになると、これはどんな無理をしてでも一仕事やろうということになるのでありますから、どうしても無理をする。しかも今申し上げましたように、言葉が非常に達者で、向うの社会にほんとうにとけ込んである方ならば、ほんとうの意味の国際競争ができる。ところがどうじやない。それか不十分でありますから、つい日本人同志がお互いに商売を取り合って、何かとこの会社が一つ仕事を思っけたとすれば、さつとそれをとつてしまふというふうなことをやる。たとえばドイツのクルツアに負けることはくやしくないけれども、日本の他の商社に負けるのはくやしいという心理状態が働くか、それでほんとうの国際競争というものはできない。いろいろな妥協ありまして、国際習慣を尊重するとか、その土地の伝統なり歴史を尊重するとか、いろいろな心かまえが取りましようけれども、まず気持を通ずるための言葉の習得は絶対に必要

だという気がしみました。

おもしろい話で、私は坐がけにある日本の名士、これは皆さんよく御承知の非  
常な名士を人でありませうが、その名士がこれまたヨーロッパの非常な名士である  
或る人と長時間会って、肝胆相照らしたという話を聞くわけがあります。私けそ  
れを聞いて行って、たまたまそのヨーロッパの名士を人にかう機会を得たので  
ありますが、その話を思い出して、これこれいう人かあなたと話をして非常に深  
い感銘を受けたと言っておるけれども、あなただけそれについてどういふふうに考  
えるかという質問をしてみましたら、どうも私はどういふ人にかうした記憶がないと言  
うのであります。いろいろ、こういう人かあいう人かというのですか、さあお会い  
したらどうか、お会いしたかもしれぬけれども思い出せぬ。要するに印象が非常  
に深い、いろいろ考えてみたのでありますか、結局その人は言葉ができないで、  
通訳を通じていろいろと話をしたらしい。そうするとどうしても誠意が通じない  
といひますか、印象が非常に深いのであります。その結果今申し上げたような

世界に有るわけであります。今国連の常用語といふのは英語、フランス語、スペイン語、ロシア語でありますけれども、少くとも今日英語、フランス語、スペイン語のいずれか、海外で働こうという人には日本語と同じ程度楽に話せるという修練を積むことか、私は絶対に必要だということを感じたのであります。

ちようと私帰ってから聞きました話に、日本のさる一流のアメリカと合弁をしてある会社があります。その合弁会社の重役がアメリカから最近派遣されて来たところの人が言うのに、これは本社の根本的方針として、自分が日本へ行ったら、日本の会社の重役会においてけもう日本語で話ができ、自分でもむろんその仲間入りをして日本語で処理ができるという程度に日本語を修得することか、絶対に必要であるということをお社から言われておるといふのです。もちろんその人も中年の人でありますけれども、このむずかしい日本語のけいこを始め、一生懸命やっております。私はそういうふうな考え方とそういう努力といふものが、国際活動をする上において実に大事であるということをお社に聞いて

みを感じたわけでございます。一面から申し上げますと、そういうふうには何でも外国人らしくなつてしまうと、日本人じやなく存るのではなにかということが考えられるのでありますけれども、これも私の感想でありますか、絶対そういう心配はない。私の感ずるところでは、日本人が日本人とうに日本人らしいよさを持つておれば、そのよさというものは世界のどこへ行つても通用するよさだと思ふのであります。日本人とうに日本人が美しいと思ふことは、世界のどこへ行つてもやはり美しいというふうには、必ず誠懇といふかた持は通ずるものであり、またみんな同じ人類ですから、同じことだと思ふ。ただそれを妨げているものは、言葉によつて自分の感情を、自分の意思が通じないといふところから、何か変なヒツケが起つてくるのだと思ふのであります。これは私が外国語をあまり知らぬものですから起つたことなすけれども、ちようと秋の季節で、菊の花は日本の国花でもあり、日本が非常にいいのだと思つておりましたら、アメリカへ行つてもヨーロッパへ行つても菊は非常にたくさんある。花屋に売つておる菊をんなが大輪であつ

て、その色のおぎやかさ、形のもてい、日本が負けるくらい菊の花をたくさん売っており、みんなそれを美しいと言つて、買つていつておるのであります。實際、案外、世界というものは同じ人間なんで、その宴はみんなの気持ち通じさえずれば、いいものはいい、悪いものは悪い、正しいものは正しい、美しいものは美しいということを通るといふことをしみじみ感ずるのであります。その意味において日本人が外国語に上手になり、外国の習慣を尊重するといふように存つても、日本のよさといふものは失われるものではないし、それはどこまででも両立するものであるといふ気がいたします。日本人がもつともつと国際的に存らなければ、日本人の経済活動といふものは国際的に広まることがない。国際社会の仲間入りはできない。これから日本人がいろいろと仕事をもつて行くところは、みんな組織された社会であります。その社会に入りこんでいつて自分も社会人の一人として活動しようといふのでありますから、考えこみればそれは当りまえな話であります。

この際私の特に感じましたことは、海外へ出て活動しようという者か、従来戦争前は御承知のように樟太であるとか台湾、朝鮮あるいは滿洲とかいうふうには日本中心に経済活動の範圍がたんと拡大していったのでありますけれども、今はその道は在りわけであります。よく世界各地にわたって経済的を活動を増していかうとするならば、その心構えとしては当然であると思つ

これに対してはお私がこの際申し上げたいことは、日本に在り残っている社会制度とか家族制度とかいろいろのことがございますけれども、それが日本人が海外へ出ていろいろの意味の活動をするのに必ずしも便利にできていないということを感じるのであります。親と子の問題とか、家の問題とか、あるいは子供の教育の問題とかいろいろございますけれども、海外へ出ておられる人々のいろいろなお話を承わりますと、そういう日本へはもがつかないところ、ここに経済活動その他の面における活動の自由さを拘束しているものが非常に多い。これはまたごけり日本として考へてあげなければならぬ筈だという気がしなすいたした



のであります。

こういふふうにいづいろ考えて参りますと、どうしても日本人口ここであらやう  
る変から再検討して國際人に与らなければならぬ。そうして國際的に日本がすべ  
ての人々と一緒の手をとつて、世界をよりよくするため經濟的に世界を繁榮させ  
ぬがて自分もその余恵を受けて涼んでいくという姿にすべての政策を集中しなけ  
ればならぬと考えたのであります。遺憾ながら今の世の中には、そういう今後日  
本が進むべき大きな道に対する決定と申しますか指示というものはつきり出  
ていないと思ふのであります。そのことをたとえて、私は今度二十カ国をまわつて  
参りましたが、今のランキンゲからいうと大体五、六番をいし六、七番くらい  
のところにある。しかし今後十年という期間を通じて考えてみると、今のままで日  
本がいくとすれば、おそくらく二十カ国の中の十九番目に落ちるであらうとい  
うことを言つたのであります。私はせむとも皆極方にこの点について各種の面  
においてお考えをいたたきまして、ぼんとうに日本が經濟的にも文化的にもより

向よし、よりよき世界に住むことが出来るようにせむ御配意を願わしいものと思つうわけでございます。

こまかいことにつきましては、二十カ国うちにはまいぶんいろいろおもしろい個々のできごとにも会いましたし、またいろいろなエピソードもございませけれども、申し上げてもさりのないことで、あとになお話もございませようから、私は一応これだけ御報告申し上げまして、何かお尋ねかございませたらお答へ申し上げたいと思ひます。

○ 永井会長代理 いまの山際さんのお話に何か御質問でもございませたらどうぞ。

○ 下村会長 私は方々で善いたり話をするとときに、たゞいまのあなたのお話を引用させていたたきますから、それだけどうぞ……

○ 山際委員 どうぞ。

○ 永井会長代理 それではこれから黒田厚生技官のお話を伺うことにいたします。

○ 黒田厚生技官 人口問題研究所の黒田でございます。

昨年十一月三十一日から十二月三日までインドネシアのバンドンでアジア及び極東人口会議という名前の会議が開かれました。政府代表の一員として参加を命ぜられました。その契について御報告を申し上げたいと思ひます。会議の議題の内容につきましても、非常に技術的な契が多いので御参考に存りがねると思ひますが、できるだけ簡単に会議の目的と性格に触れまして、その契と特にアジアにおける人口事情と申しますが人口の動向あるいは人口の構造という契につきまして、向うでいろいろ審議しました。あるはその当時配布しました資料に基いて御説明申し上げ、最後にこの会議を廻じまして私を感じました契について若干御報告を加えさせていただきます。

この会議は国連の技術的援助局とそれからエカフエが主催しまして、これに對しましてニューヨークのインターナショナル・ソシアル・サイエンス・カウンシルというのが資金の援助をいたしまして、各国政府代表のほかにフェローを出したわけであります。そういうような籍成で、オブザーバーを入れました約百三名

の参会者がありました。

先ほど山際総裁から日本人とドイツ人がよく働くというお話がありましたか、働かない更ではあちらは中南米にもまさるのじやないかという気がするのであります。会期を通じまして朝の九時から昼の十二時まで、それから三時休憩をしまして三時から夜の六時まで、こういう会議をやるのでありますか、その間にちよつと買物をしたいと思ひましても、大体商店街では朝の八時から十二時まで、それから四時ごろまで休まして、四時から六時ないし六時半ごろまであいております。どうしますと会議に出ておりますわれわれとしては買物をする暇もない。土曜日、日曜日も半日でありますし、日曜日は全休であります。ジマカルダにおきまして、アモバンドンにおきましても、そういうふうにはほとんど働く時間がございません。官庁なども朝の八時から午後の二時まで、食事は自分の家へ帰ってするといふような状況で、生産力か上りました結果として欧米では働く時間が減つていったやうでございますか。アジア地方では生産力の上らない前から働く時間を節約するといふよ

うな感じが非常に強いのであります。

そういう関係もありまして、われわれの会議は統計が中心に在るわけでありませうか、その統計が人口統計にしては国民経済統計にしては、そういうものかほど欠陥していると申しますか、あるいは調査も非常に不完全であるというふうな状況で、日本と比較しますと、そういう点に非常に大きな差がございます。しかし反面アジアの現在の段階は、先ほどお話をありましたように独立早々であります。たとえはインドネシアを以例にとりますと、日本の明治維新あるいは西南戦争の済んだころ、文化的にも経済的にもそういう現状にあるように思われるのであります。そういう意味から申しますと、あるいは当然のことのようにも考えられるわけがあります。

そういう地域での会議でありますので、議事の進行にはいろいろ支障があつたわけでありませうか、この会議の元来の目的と申しますか、これは国連が中心に在りまして、特にアジアの人口の急増ということ、それからこの地域の現在の経済

計四、経済の発展ということの閉連につきまして、欧米の社会の歴史におきましても、あるいは日本の過去の歴史におきましてもいまだかつて経験をしていないような、人類が経験をしておられないような人口の激増が、特にこういうような経済の発達しておりません生活の極端に貧困をその地域で起きにくるという事情が非常につつきりして参りましたので、こういう地域においてどのような社会経済計画を立てていかなければならないかということを考えます場合に、人口という要素を入れない場合にはどのような計画は成り立たない。しかもその人口の面における変化の激しさは、われわれの社会にも欧米社会にもいまだかつてその例を見ないような激しい変動が起きておりますし、またその変動が全地域に跨りまして今後五年あるいは十年後に起きて参りますことが、大体確定に予想されるわけです。あります。そういう人口の現状でありますので、国連の考へ方としましては、こういう地域での社会経済計画の発展との閉連において人口問題をどういふように考へたらいいか、あるいはそのような社会経済計画をけかるための人口統計あ

るいは人口研究をどういうように整備すればよからうかということはこの会議で審議していく。アジアからは日本を入れて十一カ国参加したわけでありすが、それ以外の国からは統計方面の官庁の役人、それから経済学者あるいは人口方面の専門の者も非常に少いのであります。そういうものに関係のある専門の方々が集まりまして、現状におけるそれぞれの国の人口研究について知識の交換をする。そして、どがどその研究を通じてそれぞれ国の社会経済計画あるいは社会経済の調査にその研究を活用していく。それがいかに活用されておるか、あるいは今後どのように活用されねばならないかというようにすることを審議していったわけであります。

しかし先ほど申し上げましたように統計という点では非常に不完全でありますので、国連のねらいの一つとしましては、この会議に国連から、アジア地域の人口及び人口の研究のための訓練を行いますリージョナル・センターをこの地域に作るうという提案をしておるわけでありすが、そういうような技術的方面がこ

の会議の一つの大きな要素に在つてあります。ただどういふ技術的の面をそれぞれの国の政府にどういふ建議を高めるという以外に、この会議はこのような研究を今後どのような方法でそれらの国及び国連の提案してありますリージョナル・センターに組み合わせいくかということを非常に真剣に考えたのであります。

統計の非常に不完全なという点につきまして一例を申し上げますと、インドネシアにありましたのびインドネシアの事情は多少わかるのであります。総人口というようなことはもちろんのこと、性別あるいは年令別にどういふ人口があるとか、ということは何とんばかりません。一九三一年に前領インド時代に調査があつたさうで、その後行われておりませんし、すべて推計であります。どういふようなところでありますので、非常に極端な实例に在りますか、ある領事館の外交官の家に女中がおりまして、その女中は大体三十女か三十五女ぐらいの女中に、さうでございませうか、その女中に日本人の外交官が、お前は年は幾つかと聞か



したら、大体六十ぐらいだろうと答へたので、そんをけまけない、去年子供が生  
れたじやないか、だから三十五ぐらいだろうとどうとではさうくぐらいだろうというよ  
うなことを言つております、子供が生れると、裏庭に椰子の木を植えて、その椰  
子の木の成長によつてお前は十丈ぐらいだろう、あるいは十五丈だろうという  
ようなことを言います、またバリ島に、私は参りませんでしたかアメリカのある  
學者がバリ島に参りまして、私が歸つて参りまして二日後に日本に來られたので  
すが、そのときの話を書いてみますと、バリ島のある村長らしき古い老人にバリ  
島の人口はどのくらいあるかということを用きましたら、約二十万あるだろうと  
いう、二十万をんといういう人口がこゝを水さい島にいるはまけをいというと、  
それは廿二万ぐらいだろうということ、バリ島の人口は二万をいし二十万の間  
にあるというやうなことを非常に極端でございます。

どういふ場合によくインドネシア人はインドネシア語でズーアと此を二つ重ねま  
してキラキラ、これは英語のアバウトとかアプロキシメートに當るのひあります

が、官庁の役人に会いましていろいろそのことを聞きましても、すべてキラキラ何々で、そのキラキラが非常に極端でありまして、バリ島の話などはキラキラ二万ないし二十万ということと非常に極端であります。そういうふうに統計という面ではまったく欠知しているか、あるいは欠知に近いというふうな状態でありまして、われわれが会議を進めていきます場合は、おいても非常に問題になつておわけであります。国運のほうでももちろんこういう事情は知っておりますために、今後どうするかということをお今真剣に考えております。

この会議の目的は今申し上げましたように、それぞれこの国の社会経済計画にどういうふうに人口の要素を揃えていくかということをお根本問題であつたのであります。まして、そういう点では非常に現実的を目的を非常にけつさりさせるために、かなり高い理論的を見地からこの問題をとり上げたわけでありまして、たとえばこの会議では十四の総会がありました。その十四の総会以外に八つの部会がございまして、この八つの部会ではかなり理論的の問題を扱つたわけでありまして、われ

われし非常に興味を感したてでありますか、これを申し上げてみますと、それぞ  
れ人口の角度からこの問題を考える、あるいはそれぞれの問題と人口との相関関  
係を考える、こういう行き方でありませうか、オ一番は労働力と雇用、オ二は消費  
と住宅、オ三は公衆衛生、オ四は農業の開發、オ五は教育と社会福祉、オ六番は  
工業化の問題、オ七は地域社会の發展、最後のオ八のヒクシヨン、資本形成と投  
資、こういう社会的な経済的な問題に全部ひつかかっているわけでありませうか、  
こういうような観点から人口との相関関係を考へて、これらの社会で社会上の問  
題あるいは経済上の問題をどのように扱うにしても、人口という要素を考へない  
ではどういふ計画は成り立たないのだということをかたまり深い理論的な立場から  
認識させる、あるいは認識し得るかという方向に進んていったわけであります。  
そこでオ二番目の問題として、それではなぜ人口という要素がこれらの社  
会では重要なファクターになつてくるのかということですが、それは先ほど述べ  
ましたように、このアジア地域はわれわれ人類の歴史で見られなかつたような

激しい人口の変化が起さつつある。あるいは起きてくるという状況であります。

その内容が非常に重要であると思ふのですが、いろいろここで云い込みにしてしましました内容を配付資料によりまして大体総合してみますと、次のような事情になると思ふのであります。十一カ国を中心に統計的にこれを觀察してみますと、大体三つのグループに分れるのじゃないかと思ひます。

これを發展段階的に分けたわけでありまして、オ一のグループは出生率も高く死亡率も非常に高い。またヨーロッパでは十八世紀から十九世紀初めごろの出生率、死亡率の組合せでありますか、こういうような段階がオ一のグループと考へられます。このグループでは大体出生率が四〇から五〇、死亡率が二〇から四〇くらい、従いまして自然増加率は二〇以下、こういう非常に前近代的な段階の動態率を持つてゐる諸国であります。例にとりますと、ビルマ、インドネシア、インド、カンボジア、こういうところでは出生率が四〇以上、ビルマのごときは五〇、低くてインドの四〇のことでありまして、それから死亡率のほうはビルマ

が三八・約四〇に近いのであります。その他は二〇ないし三〇というようなところで、出生率も高く死亡率も高いいわゆる多産多死型の社会であります。もちろんこれらの用々につきましても、今申し上げました数字はわれわれの国にありません。全国的な統計から出てきた数字ではございません。ごく一部の都市なりあるいは農村のサンプルをとりました。そこを調べてみた結果の数字であります。インドといえどもなおこれは非常に不完全であります。私か申し上げた数字は、インドが国運に発表してあります数字とはまた違っております。今度の会議でインドの運中が出しました数字をいろいろ参考にとつて出してみたいわけであります。インド存じも最近いろいろ研究を盛んにやつておりますか。登記制度を持つてゐる土地また何ら持つていない地域、その両方の地域の調査からさらにインド全体を推計して、このくらいだろうという数字が出てきたものとして、出生率か四〇、死亡率か三〇、従つて自然増加率か一〇というような現状であります。もちろんこれは戦後最近の数字であります。こういうようにいすれ

も出生率も死亡率も高い。たとえばビルマのごときは乳児死亡率が二〇〇から二五〇といつております。これも決して正確な数字ではございませんが、死亡率が四〇となつて参りますと乳児死亡率二〇〇、二五〇といふことも想像がつくわけでありませう。インドネシアの乳児死亡率が一五〇。日本では大体四〇から四五、六でありますか。日本の四倍、五倍といふうに死亡率が非常に高いのであります。従つて一般死亡率も高いわけでありませうか。こういううに出生率も死亡率も高くて、今度の世界大戦後の医学なり薬学なり、あるいは外科手術の進歩、公衆衛生の発達、そういう恩恵を受けていない地域であります。必ずしもその他の地域はこういう状況ではありませんが、こういう地域の人口は非常に多く、この四つの地域の人口を合わせると四億四千七百万、約五億近い人口であります。

沖ニのグループは、出生率が高く死亡率が低いグループ、ちよつと戦後の日本に当るような地域であります。戦後の医学あるいは公衆衛生の進歩によりまして死亡率のみが一方的に低下してきた地域が第三のグループに入つておりますが、シンガポール、台湾、セイロン、マレー

香港　クイ　こう　いう　国　で　あり　ます。　こう　いう　と　ころ　の　出　生　率　は　三　〇　か　ら　五　〇　く  
ら　い。　そ　れ　か　ら　死　亡　率　は　非　常　に　下　り　ま　し　て　八　五　い　し　一　〇　の　前　後　で。　普　通　死　亡　率　で　考  
え　ま　す　と　大　体　世　界　的　な　水　準　に　な　っ　て　あ　り　ま　す。　従　い　ま　し　て。　こ　う　い　う　カ　ニ　の　ゲ　ル  
ー　プ　に　は　自　然　増　加　率　は　非　常　に　高　い　の　で　あ　り　ま　す。　た　と　え　は。　シ　ン　ガ　ポ　ー　ル　に　は　自  
然　増　加　率　は　四　〇　年　に　直　し　ま　す　と　四　五　と　い　う　よ　う　な　自　然　増　加　率　を　示　し　て　あ　り　ま　す。  
し　が　も　こ　の　カ　ニ　の　ゲ　ル　ー　プ　の　社　会　に　は。　死　亡　率　が　こ　う　い　う　よ　う　に　極　端　に　下　っ　て　き  
た　に　も　か　か　わ　ら　お　出　生　率　の　け　う　は　逆　に　そ　れ　以　前　よ　り　も　高　く　な　っ　て　来　て　あ　り　ま　す。  
死　亡　率　の　著　し　い　低　下　に　対　し　て　出　生　率　の　け　う　は　逆　に　わ　ず　か　で　は　あ　り　ま　す　が　上　昇　の　傾  
向　を　持　っ　て　あ　り　ま　す。　そ　れ　が　こ　の　地　域　の　特　徴　で　あ　り　ま　し　て。　こ　の　地　域　の　人　口　は　全  
部　で　四　十　五　百　九　十　万　人。　人　口　急　激　と　し　て　は　割　合　に　少　い　地　域　で　あ　り　ま　す。

そ　れ　か　ら　カ　ニ　の　ゲ　ル　ー　プ。　こ　れ　は　出　生　率　も　同　時　に　死　亡　率　も　非　常　に　低　く　な　っ　て　お  
る。　ち　よ　う　と　日　本　の　よ　う　な　型　で　あ　り　ま　す。　出　生　率　も　低　く　死　亡　率　も　低　い　の　で　あ　り　ま  
す　か　ら。　従　っ　て　自　然　増　加　率　も　下　っ　て　あ　り　ま　す。　こ　れ　は　日　本。　フ　イ　リ　ピ　ン。　パ　キ　ス

タン、それが大体出生率が二〇、死亡率が一〇、日本は大体九、フィリピンが九、パキスタンが一〇で、大体自然増加率が一〇前後であります。こういうように出生率も死亡率も非常に下ってくる。いわゆる現在の欧米の人口動態の型であります。これがオミのグループであります。ここでパキスタンと申し上げましたか、パキスタンの数字はインドと比べまして非常に遠うのであります。これがどの程度真相に近いか、パキスタンのほうは出席しました連中もほとんど数字をあげておりません。わかりないのであります。これは国連の統計資料からとりましたのです。インドの場合の国連の統計との違いという点から考えまして、パキスタンの場合にこんな低いということはどうも府に落ちないのであります。大体むしろインドに近いのじやないかというように想像しております。しかし、下のバキ資料がございせんので一億オミのグループに入りましたか、どうもパキスタンがこの段階に入るとはちょっと考えられないのであります。このオミのグループの地域の人口を合計してみますと一億八千六百二十万くらい存ります。



アジアにおける人口の激増と一口に申しましても、こういうふうにそれの  
増減について分類してみますと、非常に段階が違つてゐるわけでありませう。オセ  
ニアグループはほとんどこれは行き着いた一つの形として問題をいわけであります  
が、問題はやはりオセニアのグループとオニのグループ、これが今後の問題でありま  
す。このグループの人口を合計しますと五億二千万くらいに存りますが、この五  
億以上の人口の国における今後の人口増加ということが根本問題になるのじやな  
いかと思ひます。いふまでもなくオセニアのグループではなお出生率も死亡率も高い  
のでありますから、現在の世界のいろいろな医学、公衆衛生、養老の進歩の影響  
を受けて参りますことはきわめて明らかであります。二年後、三年後、五年後  
においては、これらの国の死亡率が非常に下つてくるであろうといふことは当然  
予想されます。さうしますと、もう近い将来にオニのグループの型になつてくる  
であらうといふことか予想されるわけでありませう。従ひまして、すでに現在激増  
が起きておりますオニのグループと、まったく近い将来に激増の型になつてくる

であらうオ一のゲルード、この兩者を合せて考えて参りますと、アジアの人口の激増が、いかに激しくなつていくかということも想像がつくわけであり、しかもこのういようように死亡率のみが一時的に急激に下る国は、おしはらくの出生率のほうも逆に上るといふ傾向が続くわけであり、人口の自然増加がいかに激しいかということも予想されるわけであり、

こつういふ激しい人口増加が予想される地域で今後の社会経済計画をどうに考へていくかといふことは、非難にむかひしい問題であると思つのであります。

つまり、こつういふ社会では社会経済は急進しておりませんし、戦前から引続き現在をお極端に貧困な水準にあることは十分に十分知られてゐるところであります。インドをはじめ最近国民所得も多少上つて参りましたし、たとへばインドネシアにおいても米の生産は多少上つて参りましたし、しかしそのういふ現状の生産のみので、こつういふ激しい人口増加に對してはほとんど焼石に水の狀態にあります。こつういふ現状に對して一つ考へらぬます問題は、こつういふ人口増加といふこと

に對してどのようにな國民が考へ、あるいは政府當局が考へてゐるかということでありませうが、今度の會議を通じて感じましたことは、このようにな人口増加に對してこれを抑制するといふようにな考へ方はほとんど出ておりません。これはそれだけこの國の國民大衆の感じからして、長年の間貧困生活にありまして、しかも戦争が終りましたして平和になつた段階で、むしろ平和を喜んでゐる程度で、貧困の生活そのものを卑賤に感じないといふようにな段階で現在をおさておるわけでありませう。従つて國民全体の人口圧力感とあるいは人口問題に對する認識はほとんどないのじやないかといふ感じがします。従つて、家族制限のようにな問題、産児調節のようにな問題は、それ以前の段階にあると申しますか、あるいはインドネシアの例をとつてみますと、どういふ問題をとりに上げることはわれわれの社会ではタブーである、こゝういふようにな政府のかわり高官が言つておるのじやありません。會議の終ります二、三日前から決議委員會が結成されまして、私も委員に任命されたのであります。その席上で、ほかの委員の起草しました原案の中に「人口

増加を「エツクする」という言葉がありましたので、その問題にぶつかりましたときに、この決議委員会の委員にインドネシア代表が出ておりました。この問題について、「人口増加を「エツクする」というこの言葉はわれわれとしては困る、会議が済んでから自分の政府に報告する場合に、お前が出席しておつて「人口増加を「エツクする」という言葉を承認したのか」といつて責任を問われるから困る」ということで要議を申し込んできたのであります。その代表の申すのにはわれわれの社会では「人口増加を「エツクする」というようなことは大へんな政策で、われわれの社会制度に革命をもたらすものである、こういうふうに言うのであります」と申しますのは、インドネシアでは現在なお一天多妻制であり、これが社会的に公然と認められておる制度でありまして、もし政府として産児制限というようなことをとり上げて参りますと、そのような家族制度あるいは結婚制度の革命になる、そういうことを承認して自分の政府に報告できないというようなことを申しまして、その委員会でも「エツク」という言葉を「人口増加をス

ロー・ダウンする」というふうに字句を訂正されたのであります。

そういうような現状であります。人口増加に対する抑制というふうなことは全般的には考えられていない。もちろんアジア地域全体ではありませんが、おおむね全体にはそういう傾向が強いのではないかと思います。もちろんたゞ之はインドにおける家族制限の運動もございまして、セイロンにおきましても最近家族計画連盟ができました。一昨年からかなり大規模な運動を始めております。私か今申し上げましたようにインドネシアの場合は多少極端であるかもしれませんが、しかし政府当局の考えは、おおむねそういう現状にあるのではないかという気がします。

そういう人口の現状に対しまして、それでどのような社会経済計画を考へていかなければならぬか、経済計画との関連において人口をどう考へているかということがあります。これをいろいろ審議の結果なり、国運制の考へ方なり総合しまして、アジアでは今後どういうようにどのような社会計画あるいは経済計画を考

えていくかという考え方の問題でありますか、それを一応私なりにまとめましたので、  
のですか、こういうような地域で社会経済計画を実施していかうという場合には  
われわれ日本人の社会でやりましたような産業構造の高度化、特に近代工業をこ  
れらの社会を急遽に起していくということの必要性ももちろん認めるわけであり  
ますか、そのような近代工業を起していくということは、これらの国のいわゆる  
資本蓄積というようなことから考えて参りますと、ほとんど不可能に近い、そう  
いうインダストリアリゼーションそのものはけからなければならぬが、しかし  
近代工業中心には進めない。そのためにはまずインダストリアセーションの一環  
として農業社会あるいは農業の中に、日本で申しますと中小工業というか中小企  
業をおこしていく、そうすればそれに所要の資本もそんなりにたくさんは要らない。  
農村社会の中にそのような固定インダストリーといえますか、農業の科学化を  
通じて工業化を進めていくということも最も妥当ではないか、こういうような根本  
的な見解を持つておられるわけがあります。

そのねらひの第一は、目の前に起きて参ります人口の激増「これを食糧増産によつてまかなつてくゝ」食糧増産というところは農業の工業化と結びついているわけであり、増加合に対して食糧増産をばかっている。それから輸食用増産物の増産をはかる。

もう一つの観念は、農業に対する発展の問題であります。これらの地域では人口の分布が非常に極端に不均衡であります。ある地域に非常に集中的に集まつておりますので、どうしても人口の分散をばからなければならぬ。その人口の分散と農業の開拓・開墾、これを結びつけて、農業の増産を考えていく。

人口の非常に不均衡な例を一つ申し上げてみますと、インドネシアの例であります。インドネシアの現在の領土全体の人口密度は、総人口が約八千二百万、全体の人口密度は四三・二にすぎませんが、ジャバの人口密度は四一〇の人、日本が現在二四〇の人くらいですから、ジャバの人口密度のほう小けるかに高いわけであり、ジャバを除きましたその他の人口密度は一五・九、約一六人です。たとえばホルネオあたりでは、五地区くらいに分けますと一人百いし五人という

ような人口密度でありまして、人口の分布の度合いが非常に極端であります。インドネシアと申しますと、そういうように広いのではありません、領土だけでも日本の五倍くらいありますから、この領土に包まれた海面まで入れますと、欧州全体に匹敵するだけの広さを持っております。斜めに端から端まで直線で測りますと、大体ソ連のモスクワからスマインのマドリッドまでの直線距離に等しい。そういう尅威であります。現在、ジマバから主としてスマトラへの移民が盛んに計画されております。そういうように農業の崩発ということが人口の不均衡の是正と関連して行われておるわけであります。

こういう農業の崩発のためには、やはりある程度の技術化、機械化ということも行はなければなりません。そういうことと関連して農業社会の中にあるいは農業自体の中に何らかの固定インダストリーを導入して、そういうことによつて農村のアンダー・エンプロイメントを吸収する、あるいは農前期の余力を吸収する、そういうことによつて農村社会のコンプリート・エンプロイメントをは



かつていくということが工業化の一環として考えられておるわけでありませう。そしてそのことが次の段階の工業化の前奏曲となり、それを一つの出発点としてやがて近代的な工業をおこしていく。そういうスタートをそこにおいて切るのであるという考え方を国連当局側におきましてもとつておられるようであります。また、現在セイロンあるいはインドネシアあたりでもこのやり方をとつております。それは何よりも激増する人口を食わせるに足らないという面からの要請がこういうことを要求しているとも言えるのじやないかと考えます。かように、経済計画の面では農業の中における工業化ということを中心として考えられておられます。

それから第二番目のこの社会経済計画についての考え方もあります。これは日本あるいは欧米で考えておりますように、その社会の経済計画ということとその社会の経済制度というものの関連については、これは問題になりまして、計画経済はソ連経済であると、あるいは修正資本主義においても可能であるというように、この問題になります。これらのアジア地域においてはプランニン

ゲということは現在全然問題にならないのであります。と申しますのは、今申し上げたような人口のまことに著しい増加に対して、これを養つていくためには、これらの社会の民間経済と申しますか、プライベート・エコノミーと申しますか、民間の自発的な意思にまかせてその社会の発展を促かかっていったのでは、この増加する人口は養えない、どうしても政府の力、国家の力によつてそのようないろいろな面の施策、計画をやつていかねいことにはどうにもならないのだという非常にさし迫つた要請を持っております。そのためにこれらのいふ所の社会におきましては、経済計画ということも真正面からとり上げられておるわけであり、セイロンの例をとりましたも、農業開発ということも政府が投資してやつておりますか、総て出に占める農業開発の割合は三五%を三〇%をけるかに超えております。政府は支出の三分の一を農業開発のために支出しております。移民にしても、スマトラをほんどん開拓してジヤバから移民を持ってくるわけであり、また、それも政府の費用において小さな家を建ててやるとか、森林を壊さぬつて

あとは手を入れて耕作しよえすればいいということころまで政府が全部負担してや  
り。あとそれぞれ移民にやらせるというように政府の投資が積極的に行われて  
おります。その他工業面につきましても、セイロンあるいはどちらにおいても政  
府が必ずからさうという面に積極的にタッチする。もちろん民間の努力もあります  
が、人口からくるこのような緊急な国の要請に対しては、どうしても政府が積極  
的にタッチしなければどうにもならまいということから、このような社会経済計  
画、プランニングということがほとんど無条件に理念の上で採用されているとい  
うように考えるわけであります。

次にインドネシアの現状と申しますか、あるいは日本との経済協力、こういう  
ことにつままして一言前感を申し上げたいのであります。何かにもインドネシ  
アにおりましたのは二週間余りでありまして、しかもその間、会議の間はほとん  
ど朝の九時から夕方六時までカン詰めになれまして、夜は夜を翌日のいろいろ  
な準備をしなければならぬという状況で、インドネシアのことを申し上げるの

はけなはだ脅越だと思つのでありますが、ただインドネシアの現地の土を踏みま  
して一般民衆から受けた感じ、現実にこの目で見たり耳で聞きました感じは多少  
とも印象に残っておりますので、その裏を一言つけ加えたいと思ひます。  
インドネシアの現状は今までいろいろな人々から言われておりますので、特に  
申し上げることもないと思つのであります。ただインドネシアは他のアジア地  
域の国と非常に違つて、われわれ日本にとりまして特に非常に重視すべきじゃあ  
ないかという裏があるように思つのであります。これはたとへば現在の仏印が多  
少それに似たような感じがいたしますが、何かの地域とはかなり違つております。  
というのは、独立の経過がたとへばインドその他諸の国と非常に違つていて、日本  
との關係が独立の経過において結果的にはプラスの役割を日本が果しているとい  
うようなことでもあります。一般民衆の日本人あるいは日本に対する感  
じが非常に親近感を持っております。アジアにおける自分たちの兄貴は日本だとい  
うことが民衆に非常によく入つております。もちろんこれはわれわれが接した

限りにおいてでありまして、百パーセントそうかということは何題であります。占領時代のいろいろを悪い面もあつたと思ひますが、その他の地域に比べますとインドネシアでは多少の悪い面があつたとは思ひますが、これは全部相殺されてしまつただけのことか独立の経緯に伴つて起きております。それはことさらに申し上げる必要もないと思ひますが、そういうふうなことからインドネシア人一般の日本人に対する関心あるいは親近感非非常なものであります。

それは単にわれわれが直接仕事上会つた人たちの感じばかりでなく、私たちはバンドンに着きました当日、宿舎から会場に向います道路上でインドネシア軍のジープが通りかかりまして、走り通るジープの中からわれわれに向つて「さようなら」という声をかけられ、われわれも啞然としたのであります。もう一ぺん振り返つてみますと、反対側に乗つていた兵隊がまたわれわれのほうに向つて「さようなら」といつて手をあげておる。あるいは夜散歩しておりますと、インドネシアの若い青年が自転車に乗つて通りかかりに「こんにちは」といふ。

どうしてわれわれが日本人だということが瞬間にわかるのかふしぎに思ふくらいであります。各地を回ります。まったく無関係の民衆がそういうふうには日本人に對しては知っている日本語は全部話さなければ気が済まないというふうには、何かナヤンスかあります。日本語をしゃべりたくなり、あるいは自分の知っている片カナを書いてみせるというふうなことがある。会議におきましても、われわれの接しました労働省の役人が日本の労働調査を見せてくれというので、たまたま東京で作りました労働調査の英文のありましたから、それを見せてやります。非常に喜びまして、去年の三月には早速この方法でわれわれの国では労働調査をやりたいという。日本のその労働調査も、日本から見ますと、むしろその手本はアメリカにとっておろところがあるのではないかと、インドネシアの役人は、この日本の労働調査はアメリカなどよりはるかにいいというふうに言うのであります。何かかくさぐさったい感じかしたのであります。そういうふうにはむしろ無條件に日本のやり方に対しては尊敬の念を持っておるのであります。アジアの諸

スック  
国のうちで、もろろん度合いの差はありましようか。インドネシアの対日感情と  
いうものは非常にいいのであります。そういうことがオースの条件であります。

オニの条件は、先ほど出際終裁もおっしゃいましたように、インドネシアにお  
きまして、非常に豊富に未開発あるいは未調査の資源がふんだんにあります。

しかもこれらの地域ではほとんど人口が稀薄であります。今後開発さるべき資  
源はふんだんにあるということであります。

オミは、非常に重要に存りますか。その他のアジアの国においては、独立して  
もいけゆる欧米的な色彩が非常に濃厚であります。たとえばその社会の産業資本  
方と見ますと、フィリピンなどは米国の資本が八割を占めておる。その他の地  
域におきましてもほとんど英国の資本が入っているというふうで、欧米の色彩が  
一応経済的あるいは産業的にかなりはつきりしております。ところが、インド  
ネシアでは独立後従来オランダの権益に対しては相当根本的にこれを排除して  
あります。なおオランダの権益らしきものは残っておりますが、ホテルにし

てもエステートにしてもあるいは工場にしても、ほとんどこれを接収してしまつたのであります。従つてオランダの力というものはほとんど排撃されておられます。そしてしかもそれに代るべき欧米の色彩は現在にはお入りつてありませんが、また入つておりません。いわばインドネシアはアジアの中での真空状態にある。こういうことかインドネシアの非常に大きな特徴じゃないか。そういう意味では仏印もある意味を似ていますが、私どもはインドネシアが日本との関係において重要な位置を占めてゐるのではないかと考へるのであります。ただオランダとの関係は現在ニユーギニアの前途の問題で係争中でもありますし、特にオランダに対しては非常に排他的な感情を持っており、そういう一つの反射作用として特に日本に対していい感じを持っているといふようなことも伺うのであります。欧米の色彩が非常に弱い。最近までの各内閣におきましてもこういうような排外政策は非常に強力にとられてきましたし、最近ではそのような排外的な政策の結末として、たとえばオランダが持つておりましたいろいろな種類のエステートが



ありますか、そういうところではインドネシアに接收しました結果として、たと  
えば砂糖にしてもゴムにしても、生産額かとんに二割に減ってしまったという  
ようなことで、ただむやみに排外政策を強めても自分らの国では生産が上らない  
というようなことか反省されて参りました。外國の投資、借款あるいは企業的援  
助というものについては最近けがなり反省気味で、自分の國の生産を上げていく、  
經濟の發展をはかつていくためには、これはよほど慎重に考えていかなければな  
らぬ、むしろ場合によっては相当どういふものを入れていく必要かあるのではな  
いかというふうな現在の内閣では考えが變つてきております。そして先ほどお話  
がありましたように、インドネシアに対しても英米はいうまでもなくドイツ、フ  
ランス、ベルギー、これらの欧米諸國かいろいろな手を打ち始めております。  
日本では逆に賠償問題にひっかかりまして、この夏の進捗が非常におくれておる  
ということも残念に思ふのであります。たゞいまこのような真空状態にある、そ  
れから根本的に國民全体の対日感情が非常にいい、そういう条件を持つておりな

から日本が出られないということ、日本にとりまして遺憾を感ずるは否かろうか  
と想うのであります。

賠償問題とは私は門外漢であります。現地にありましていろいろ感じます。こ  
とは、賠償額をば別にしまして、日本がインドネシアにたとえば普通の工業学  
校の一つや二つは設備して、実験の機械などあるいは先生をつけてインドネシア  
に賠償問題がさまる前に寄付してやるといふようなことも、できればやったほう  
がよいのじやないか。現在のインドネシアでは技術はもちろんありませんし、い  
わゆるマネージメントも少くありません。それから労働者の技術訓練はほとんど  
百パーセント欠如しております。従いまして工業学校というやうなものを日本が  
賠償の一環として、あるいは賠償の別ワケとして、こういうものを寄贈してやると  
いうことであれば、五年後、十年後あるいは二十年後には日本との關係が非常に  
いい意味で相互の協力欠けざるのではないかといふやうなことも、考えたので  
あります。しかもそういうことはインドネシアの現狀としてもおそらく喜んで受

けるのではないか。賠償額の中に入れるとかどうかとか言っておれは受けないか  
もしれません。そういうことをやってもいいのじやないか。それか日本との経  
済協力あるいは日本とインドネシアとの關係を順調に進めていく場合の一つの大  
きな潤滑油に存るといふことか考えられます。

さらにそのようを潤滑油としましては、たとえばわれわれの人口關係の問題に  
しましても、いろいろ向うのインドネシアの官庁の連中とつき合いますと、こ  
ういふ問題は日本ではどうしているか、こういう統計は日本ではどうであるかとい  
うような質問が盛んに出て参りました。われわれがきわめて簡單な労務調査の資  
料にしても、その他簡單ないろいろな統計の実施方法にしても、そういうものを  
ただ英文でやりさえすれば、インドネシアあたりでも非常に役に立つわけであり  
ます。單にインドネシアばかりでなく、われわれがそのようなほとんどの經濟上の  
利害を伴はないような仕事の面におきまして、われわれの国ではこういうように  
やっていると、いふことを知らしてやるだけでも、これらの国では積極的な効果か

あるように思うのであります。そういうことから東南アジア地域との経済協力を進めていく場合のまた一つの洞窟知に在るような気がするのであります。

インドネシアとの関係は今後において一日も早くそういう関係を進めていく必要があるのではないかということに非常に強く感じられたわけでありました。これはインドネシアに限らず、その他の地域全般についても同様だと思つておられますか。しかし特にインドネシアは、先ほど申し上げましたような条件からしまして、最も日本にとりまして有望な地域なのであります。

ただ、この経済協力を進めていきます場合に、われわれの考え方を昔と相当根本的に変えていく必要があるのではないか、単純にこれらの人口希薄な地域に農民か肉体労働者として行って働くというふうなことももちろん悪くはないと思つていますが、向うの立場を頭に入れて考えていきますと、こういうことはほとんど考えられないのであります。純然たる肉体労働移民というふうなものは、とてもこの国では日本人が入っていくことは許されません。そういうことでなくて、やは

リ技術的方面での指導とか、あるいはいけいわゆる頭腦的輸出といいますが、現実に向うに行つて小さな工場を経営指導とか、向うの必要に感じていろいろを計画もしてやれるような頭腦的を輸出ということかこれらの地域では要請されていくのであります。向うへの肉體労働の移民というようなことは非常にむづかしいと思ひます。そういう点で日本のこれからの対外経済関係の樹立という場合においては根本的に方針を変えていく必要が出てくるのでないかと思ひます。そういう際には、先ほどお話がありましたように語学の変ひ、たとえばマッチ工場一つつくるにしても、いかに技術が優秀でも、語学的にできませんとそれが指導できないのであります。われわれの対外的な協力の面においては、技術はもちろんのこと、それぞれの人かそれぞれの国の言葉を勉強すること、それは英語一つでもけっこうでありますか、そういう点に若い人が眞剣な努力を払うことか、今後の日本の経済協力、特にアジアとの協力を考えていく場合には最も重要なことではないかと思ひるのであります。

順序がいろいろ前後しまして、大へんおわかりにくかったと思ひますか。大体  
これで終ります。(拍手)

○ 永井会長代理 御質問はございませんか。——それは本日はこれを閉会する  
ことにいたします。長時間どうもありがとうございました。

午後三時四十分散会